

琉球大学学術リポジトリ

アクティブ・ラーニングによるピアノ実技習得実践 報告

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2020-04-06 キーワード (Ja): アルベニス, グラナドス, モンポウ キーワード (En): 作成者: Uehara, Yukine, 森, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45475

アクティブ・ラーニングによるピアノ実技習得実践報告

上原由記音(本名:森 まゆみ)*

A Report on Active Learning in Mastering Piano Practical Skills

Yukine UEHARA (Mayumi MORI)*

1) はじめに

これは、琉球大学教育学部学校教育教員養成課程音楽教育専修で2016年4月から開始したアクティブ・ラーニングによるピアノ実技習得2019年1年次ピアノI Aクラスの実践報告である。

なお、この授業の「試み」については、本学教育学部紀要第94集にて既に執筆している。

自学自習は、教員が情報提供する範疇と、学生自身の自らの探求心にゆだねる部分との、その線引きによって効果は大変左右されると当初から考えられた。情報提供の内容が毎年同じであっても、その把握はそれぞれの学生によって異なり、またグループ授業であるため、その学生たちの作る雰囲気によっても対話的自発的な学びに大きな差があることは、想定されていた。その状況の中でも特に、本学年は滑り出しにおいてその難しさを感じたが、前期後半から改善が見られ、夏休みを挟み、後期に入るとそれぞれに大きな成長が見られた。

昨年より「スタートアップ」という授業が新規に増設され、筆者はそのうちの2コマを担当したため、ピアノ演奏法についてより多くの情報提供を加えることができた。

例えば、書物からでは得られない音色の響き、音量、指先の重量、スローモーションでの指、手首、肘、上体の動きなどの情報については、汎用できる情報の与え方に注意して、筆者がピアノを実際に演奏して説明することを度々行った。

また、楽曲の分析が間違っている場合は筆者がそれを指摘し、改善させ、その分析をどう解釈し、どのような表現をすれば良いのかについて、筆者から質問し、確認する場面を多く作った。筆者自身も、他の学生と同様にコメントし、学生のコメントについて、補足や修正が必要な場合は、それについての説明をおこなった。

2) アクティブ・ラーニングを始めるにあたっての指導内容

(第94集の「ピアノ実技習得におけるアクティブ・ラーニングの試み」での執筆と重複する部分は簡潔に述べる。)

- ①筆者の琉球大学教育学部音楽科論集第4集の紀要論文「ピアノ演奏への考察：重量奏法から感情尺度によるラベリングまで」を読ませ、ピアノ演奏が単に音譜を鍵盤で叩くことではないとの理解を深めた。なお、これを唯一の理想と考えず、必ず他の論文を読み、色々な知識を得るように指導した。
- ②実際のピアノのダンパーモデルを見せ、どのようにハンマーが動いて音が出るのか楽器の構造を理解させた。
- ③人体の骨格(特に尺骨や橈骨といった腕の構造について)を理解させ、演奏には小指主導が有効であることを説いた。
- ④腕の使い方が響きに関係することを理解させるために、実際に、力を入れてダンパーモデルの鍵盤を打鍵した時と、脱力して打鍵した場合の

* 琉球大学教育学部 教授

ハンマーの動きの違いを見せ、上記と同じ動作を、筆者が実際のピアノで行い、ピアノの音が異なることを確認させた。

- ⑤鍵盤を打鍵する指先のフォームをきちんと保持しながら、腕や肩が脱力できている状態を、筆者の体を触らせることにより理解させ、学生一人一人に実践させ、問題点を探らせた。
- ⑥音の陰影を作ることが、感情表現に必要であり、それには陰影を作るための技術を知ることが大事であることを理解させた。
- ⑦楽曲分析書・解釈演奏法などの書籍を参考に、楽曲の作品分析に挑戦させ、その分析をもとに、それを効果的に表現するには、どう演奏したらよいかを確認した。
- ⑧脱力はできているか？楽語の意味は調べたか？作品分析をしたか？作曲家について調べたか？などの問いかけ(30問)が並んでいるリフレクション・シートを配り、色々な側面を忘れずにチェックさせるようにした。
- ⑨音楽史を学び、芸術の潮流を知り、それぞれの時代の様式、価値観を考え、バロック、古典、ロマン、近代、現代 それぞれの特徴を尊重するように指導した。
- ⑩音楽を作っている要素をよく理解すること。長さ、高さ、リズム、強さ、ハーモニーが変化するとどうなるのかをよく考えるように問いかけた。

3) 前期の指導スケジュール

1週目・・・新入生「オリエンテーション」(4月3日)で、①を課題に出し、次の授業開始時に「論文を読んで理解したこと、理解できなかったこと」をレポートに纏めて提出させた。中学・高校生の間にレッスンを受けた曲目を提出させ、今後の選曲に、時代・形式の偏りがなく見極めるための資料とした。

2週目・・・「スタートアップ第1回」の授業(4月10日)に、②～⑤の楽器の仕組み、人体の仕組みと、有効な筋肉の使い方について実践による指導を行った。しかしながら、これは問題提起にすぎず、習得するまでには、繰り返し確認と、習得の

ための本人の工夫努力を必要とすることを伝えた。

この日に、次週の為に、現在演奏している作品1曲と、今まで1度も弾いたことのない作品1曲の演習課題を与えた。後者は、今後、学生が取り組んでいく作品を学生自身に選曲させるため、その選曲がその学生に相応しい難易度であるか否かを見極める判断材料になる。初見力の弱い学生が難易度の高い選曲をした場合は、筆者からアドバイスをを行う。

3週目・・・「ピアノ1A」の授業で、2週目に与えた課題2曲を演奏させ、そのあと「ピアノ1A」がどのような授業であるかを下記のように説明した。

- ・教員(以下、筆者を指す)の言葉に従って、弾き方を直すのではなく、理論を裏付けにどう弾くべきか、どう弾きたいかを自ら考え、そのためにどのような手段、どのような工夫をしてステップアップを図るかを自ら考える授業であること。
- ・授業では、前回の授業で何に気付き、1週間どのような努力をしてきたかを口述で発表し、発表後に仲間と教員からコメントを受ける。
- ・仲間は互いの発表曲目に対して、前もって情報収集し、分析も確認し、情報共有してから授業に臨むこと。コメントは単なる感想ではなく、知識をもって客観的に述べる事。自分が演奏している楽曲以外に、仲間の演奏する楽曲に対しても知識を増やすことが大切である。
- ・コメントを述べるときは、必ず良い部分と改善したいと思われる両面を述べる事。必ず、楽しい雰囲気作りを心がけ、正しい言葉の使い方をし、音楽を言語で表現し、ちゃんと聞こえる大きさの声で述べる事。
- ・マンツーマンで受けてきた従来のピアノレッスンと異なり、自らの研究の分量が多くなるため、実際の演奏の履修曲目は少なくなることは承知すること。演奏方法について教員の指示に従い、練習方法についても同様に教員の指示の通りに行うほうが、短期間に上手く演奏することができる。しかし、この方法では、常に指示を待たなければならない状況になる。それと比較して、自ら理想を考え、その理想に向かってのステップアップの方法を自ら生み出す工夫

を考えるようになることは、時間はかかるが、応用力がつき、将来的には自立することができると思認すること。

この考え方は、本学のURGCC（学士課程教育の質の保証を目的としたカリキュラム）の自律性、社会性、情報リテラシー、問題解決力、専門性にあたり、ピアノ演奏だけでなく、社会の中で生きる力を身につける学びである。また、仲間にコメントすることは、URGCCのコミュニケーション・スキルをつける学びである。

- ・選曲については、時代、形式を偏りなくバランス良く選ぶ事。また、「ピアノ1A」にかける演習の時間的な負担が大きくなりすぎないこと、他の教科を考慮してバランスの良い分量になるように作品の規模や難易度を選ぶこと。
- ・比較聴取する模範演奏は、世界的に評価を受けているピアニストの演奏を選び、必ず複数の演奏を比較聴取すること。それらのピアニストの抽出も各自工夫し、安易に教員に尋ねないこと。多くの選択肢からどのような手段によって良いものの抽出をおこなうか、そのプロセスも大切である。

但し、自分が努力工夫しても、結果が得られない時、判断に迷う時は、自ら進んで教員にも質問をすること。努力の後に、他人の助言を求めることは進んで行うようにする。

- ・自分の演奏を客観的にチェックするためには、録音録画を利用し、楽譜を見ながらアーティキュレーションや音のミスなどに注意する。
- ・1年間の自分の目標を掲げ、さらに前期・後期それぞれに目標を設定し、その目標達成のための進捗度においても例えば、バッハは1カ月で1曲、ツェルニーは3週間に1曲完成させるなどの個人個人の計画をたてること。教室運営も学生主体で行い、授業時間内の配分などを考える。これは自分が教員になった時に授業の時間配分、年間計画をするスキルを培う。

4週目から・・・その後の授業では、演奏する楽譜に直接分析を書きこませ、弾く前に教員に提出させた。ツェルニーのような和声分析が簡単なものであっても、確認のために楽譜に記入を行わせて、間違っている場合は教員が指導を行った。シ

ラバスで、1回の授業で1曲ずつ、エチュード、バッハ、曲の3曲をローテーションさせていくように明記されているものの、学生はシラバスを見ていない者が多く、前回の授業と同じ作品を発表するなど、進捗度に偏りのある学生が多く見られた。徐々に⑥～⑩についても必要に応じ、説明し、繰り返し確認をした。

9週目（6月4日）・・・「スタートアップ」第2回目の授業で、学生全員で楽曲分析を行った。教員側では2曲の作品を用意していたが、思ったより分析になれておらず、手間取り、バッハ作曲インヴェンション第1番の分析だけで、1時間以上の時間を要した。

これは、当教室の入試制度で、小学校教科教育専攻や推薦入試Ⅱは個別審査で楽典が行われないため、学生の知識にばらつきがあることが原因の一つに挙げられる。

この授業まで、楽曲分析を最初は無視してただピアノを弾くだけだった学生も、徐々に分析を始め、それによって演奏がどうあるべきかを考えるようになった。本来、ピアノ1Aの他に理論担当の教員により、楽典や和声分析の授業も必須科目になっており、また入学時には、分析の方法は知っている全員が答えていたため、授業ごとに学生の提出した分析に首をかしげる内容が見受けられてはいたものの、6月のこの授業で、改めて学生達の分析についての知識の不足と、分析に対する意識の低さを、筆者は知ることとなった。

作品を解釈するには分析が重要であり、そこからそれをどのように表現するのかを考えなければならないことを改めて説明し、これ以降、皆が分析に挑戦するようになり、発表の前に筆者に分析を書き込んだ楽譜を提出するようになった。

14週目まで・・・エチュード3曲、ポリフォニー2曲、曲2曲の完成（「合格」）を最低ノルマとし、これをクリアすることが試験受験資格としていたため、それぞれの学生が、自らプログラミングして教員と出席学生の合議による「合格」を得るように努力した。

特にバルトーク等の、学生にとって馴染みのない作曲家については、その作曲家についての情報

をレポートに纏めて提出をさせた。「前期を振り返って・今後の計画」をレポートにまとめる課題を出した。

15週目・・・ピアノ1 Aクラスだけではなく全学年ピアノ実技履修者合同で試演会を行い、教員と学生全員がそれぞれ学生一人ずつに筆記でコメントを書いて渡し、試験へ備えた。

試験・・・各学年に課題となっているスケール・アルペジオ(1年次前期はC dur, a moll, G dur, e moll) から籤で1曲を選んで弾き、続けて自ら選曲した作品を全員の前で演奏会形式により発表し、この時は仲間からのコメントは無く、教員が採点を行った。

レポート「前期を振り返って・今後の計画」を提出させた。

夏休み・・・夏休み中の課題についても、筆者は指示せず、学生自ら掲げた問題点への取り組みが行われた。

後期・・・後期開始1週間前に、筆者から学生に「夏休みの取り組み・後期の目標」についてのレポート課題提出をメール連絡し、後期1週目にペーパーマテリアルにて提出し、授業時には仲間の前で、口述で発表して、それから演奏を開始した。

その後

・・・この報告書をまとめているのは10月末であるが、既に1年次は5回の授業を行い、その中で、自ら後期の目標を立て具体的な履修目標楽曲を決め、授業内での発表曲目のローテーションを組み、それぞれ楽曲の作品分析をし、その都度、自分の目標と目標達成の方法を明らかにし、発表をするようになった。コメントについても前期に比べて、多角的な意見を持つようになり、大きな改善がみられている。引き続き、試行錯誤を重ねながら続けていく。

4) ケース・スタディ A

沖縄県の離島からやってきた学生Aについて具

体的な例を挙げてみる。この学生をここで例に挙げる理由は次のようである。

この学生は、入学時に難易度の高い作品を演奏していたが、技術的な部分に問題があった。特に右手の中指、薬指、小指の動きの独立が上手くいっておらず、これらの指を並べて使うときに、もたつくか、または転びがちになってしまう危険性があった。

技術的な問題を解決するには、技術的な訓練に終始した楽しみのない技術に特化した練習曲、過酷な演習曲を行わなければならない。

音楽的な内容の作品を選曲する場合も、基礎的な技術面を確認することができる小品を選ぶことが好ましい。難易度の高い作品は、同時に音楽的な内容も高度で、学習者にとっては憧れであり、学習へのモチベーションは高くなる。難易度の高い作品を弾くことを避けるということは、多くの場合、魅力的な作品を避けることともなり、今までの自分が弾いてきた作品のレベルを何段階も下げることになる。

このような理由から、基礎を見つめなおすことは他人から言われて、不本意ながらやってみようかというぐらいの気持ちで、容易に結果が手に入るような事ではないのである。本人が自発的に改善のための努力に立ち向かっていく気持ちを持たなければならない。このような挑戦をするには、勉学に対して真摯な態度が必要となる。

このような難問題を、この学生Aは、アクティブ・ラーニングのクラスの中で、自ら自分の問題点に気づき、自発的にエクササイズに挑戦し、長い夏休みの間も努力し、改善の方向に導いている。指の独立については、長い時間の訓練が必要である為、現時点で、技術面での問題が全て解消された訳ではないが、その前進は大きなものだった。

前述のように、グループ授業の中で、必ず良い点と検討すべき点を述べるというコメント方法がルールで決めてあったことが、精神的に無理のない気づきを生んだと筆者は考える。学生の個々の個性により着眼点が多岐にわたり、改善点について意見が集中しなかったこと、またコメントの伝達方法が、学生の個性により言葉の使い方やニュアンスが異なり、改善点への圧迫感を回避できて

いたと感じる。

学生Aは、そのような仲間同士の対話の中から、自分の課題に気づき、受験時から入学当初は難易度の高いベートーヴェンのソナタ「ワルトシュタイン」を手掛けていたが、徐々に「ソナタ第7番」を経て、次にはシューマンのピアノ曲集「ユージェントアルバム」から「思い出」という1ページの作品、またバルトークの「ソナチネ」から「熊の踊り」という小品を自ら選曲してくるようになった。

技術面に対し、筆者は、「練習曲としてピシュナやハノンという教材を取り上げると良いですね。」という短いメッセージを与えるだけであったが、日々、練習室から熱心に学生がこれらに取り組んでいるのが聴こえていた。また、夏休み中には、自ら前述の教材に熱心に取り組んだらしく、夏休み明けには大きな成長を見せてくれた。

学生Aについて筆者が気付いたことを時系列に纏める。

5月8日	ワルトシュタインの2楽章を「初めて表現を自分で工夫して弾いてきました」と述べて演奏した。分析しておらず、テーマの理解が薄く、感覚的な演奏に留まっていた。
5月15日	1の指を使うときに手首が下がる。黒鍵白鍵の打点が離れすぎており、それぞれの指のアーチ型の角度が異なる。
5月29日	ピシュナを弾くときに特に4の指だけが伸びている。ワルトシュタインについて、ゆっくり片手で弾く事、比較聴取を細かく行う事、分析も細かく行うことを助言した。
6月5日	スケール・指先がバタバタしないようにし、親指は寝かせずに立て使うこと、ハノンなどの基礎練習を行うことを助言した。
6月12日	ピシュナは指をアーチ型にしよう。ツェルニー13番、ベートーヴェン7番は、アーチ型を整えてからテンポを上げるように助言。
6月19日	ピシュナは動画を撮り、指の形を確認した。バッハ・インヴェンション4番は、分析をきちんと行い構成力が良く合格した。
7月4日	ツェルニー14番は第2関節を上げて弾くようになった。シューマン「思い出」分析は行っているが、まだ音を読むのに精一杯。
7月10日	シューマン「想いで」では、メロディであるソプラノをレガートに弾くことができるようになった。バルトーク作曲ソナチネに挑戦。

以上から、6月4日の「スタートアップ」の授業をきっかけに分析の重要性を感じ、変化が起きたこと、6月19日に演奏の録画を皆で確認したことが、指の形の改善に影響したことが分かる。動画を見ながら、学生がそれぞれ意見を述べる活動のなかで、この学生は自分の問題点と改善方法に対し、積極的に向き合うようになったと観察された。

学生Aのレポートを下記に転載する。

「前期の反省と後期に向けて」

①前期の振り返り

前期に出来ていたと思う事は、もともと意識していた肘の使い方、先生にもお褒めの言葉を

何度かいただいた音楽的な表現の面です。特に調による表現を工夫することを意識して弾くようにしていました。他に、自分ではあまり意識していなかったのですが、少しの時間で、短時間で直ぐに変化がみられると先生に行って頂いた点です。これからももっとピアノに時間を費やせるように、もっと成長できるように頑張りたいです。

前期の課題として残っていることの一つは、脱力です。脱力ができれば音色自体が変わり、和音も響いた美しい音が出せるようになるため、改善の即効性は無いけれど、自分の長期の課題としてこれからも取り組み続けていきたいと考えています。

その他、4の指と5の指を強くすることで、これはピシュナが効果的ということで、ピシュナを取り入れた練習にも取り組みました。

②夏休みの課題と結果報告

私が夏休みの課題として、力を入れたことは、前期の課題でもあった4の指と5の指を強くすることです。指を鍛えることは、私が前期で履修したシューマンのようなソプラノにメロディがある曲でも、美しく聴こえることにつながるため、これを夏休みの目標として取り組みました。由記音先生に教えて頂いたピシュナを使った練習方法を出来るだけ毎日するようにし、目標達成できるようにしました。その結果、以前よりずっときれいなフォームで指を動かす事ができるようになり、ソプラノがしっかり聴こえるようになっていたのを実感できました。

③後期の計画

後期は夏休みに目標として取り組んでいたことを生かせるよう、割と和音も多く、メロディラインをしっかり聞きながら出すようにしなければならぬのが特徴であるベートーヴェンのソナタ第2番1楽章を弾くことにしました。長めの曲ではあるけれど、練習する時間を充分に作る夏休みを挟むため、前期よりも難易度の高い曲に挑戦しようと思ったのも選曲した理由です。また、ピシュナの練習はやめることなく、毎日の継続的な練習が大切だと思いました。さらに、夏休みの間での達成目標とはしなかった脱

力も、もっと意識するようにし、それによる音色の違いにも気を付けながらより自分のテクニックを向上していけるように頑張りたいです。

以上

学生Aの前期履修曲・・・

ベートーヴェン作曲ソナタ7番第1楽章、バルトーク作曲《ソナチネ》より「熊の踊り」
シューマン作曲《ユーゲントアルバム》より「思い出」、バッハ作曲インヴェンション12番、4番
ツェルニー作曲40番練習曲 12番～14番、31番
以上

5) ケース・スタディ B

学生Bは、「スタートアップ」の授業での説明をよく理解しており、最初の授業から作品の分析、模範演奏の比較聴取も行ってきた。全体に音量が弱く、指の先に重みが乗らず、そのためには指の力を鍛え、なおかつ腕の脱力をして、身体の重みを指に伝えることが課題であった。これも学生A同様に、身体の使い方に関する基本的な問題の解決を必要とするため、忍耐と努力を要する。しかし、本人の気づきと努力により、後期になって音量が増え、大きな成長を見せてくれた。

学生Bについて筆者が気付いた点を時系列に纏める。

4月24日	分析、比較聴取を行っている。メロディと伴奏に音量の差が必要。
5月15日	スケール（音階）でさえも音楽的に弾くことができるが、音が弱い。伴奏との音量差を大きくする事が必要。肘の動きが止まっており、重心移動が必要。バッハも音楽的である。力を抜いて指に重みを乗せる事。自分と教員の動画を撮り、違いを認識させる。
6月5日	鞭のように腕を使うように指導。黒鍵と白鍵の打点が開きすぎている。
6月12日	薬指、小指の打点を近づけること。スケールもレガートに弾こう。
6月19日	薬指、小指に重心を乗せるように。
6月25日	高い音（薬指、小指）を強く出すように練習してきた。脱力が必要。
7月4日	バッハで短調で表情を変えているところが良い。比較聴取でニコラエワを参照したとのこと。ショパンにリズムの間違いあり。
7月10日	ショパンでのリズムの間違いは改善されず。音にもミスがあり、和声分析をして和音のミスに気付くように指導する。

ショパンの作品では、リズムの微妙な間違いを3週間改善することができなかったが、筆者は、右手の変ホの音を左手の変イの音に合わせなさい、というような方便は教えず、理論的な音価の理解をさせ、同時に幾つかの模範演奏を比較聴取し、自分がどのように違うのかを確かめさせるように指導した。

しかしながら、聴覚だけでは、間違いを判別する事がなかなかできず、神経を集中して聴くことにより違いに気付くのを、根気よく待たなければならなかった。テキストのように目視できるものは、例えば、指さしながらゆっくり読むことで気づきに繋がることもあるが、この事例の場合は、右手と左手のタイミングがずれており、それを聴力で違いに気付くのは容易いことではなかった。最終的に、便宜的な指導なしに、自ら間違いに気づくことができた。注意力を散漫にしたまま取り組む姿勢から真剣に集中して取り組む姿勢に変わり、本人も手ごたえを得たと思われる。

また、タッチの弱さは、指の筋力が弱い事、身体の脱力が充分に出来ていないことが大きな要因であり、これは文献を読んでもなかなか理解できないため、学生Bだけでなく、ピアノIA全員のために、筆者がピアノを弾きながら、または演奏以外の姿勢にて、身体を触らせ、脱力の状態を探索させるようにした。演奏するための基本的な身体の使い方の習得は、遠い目標に向かって弛まぬ努力を持続させなければならないので、皆で考えさせた。互いに知恵を持ち込み、工夫し、励まし合い、へこたれずに続けることが重要であった。このような遠い目標に向かう努力は音楽の学びに限らず、教育の現場の色々な側面で常に必要であるため、学生たちは真面目に取り組んだ。

このことが読みとれる学生Bのレポートを次に転載する。

①前期の振り返り

手の形、指の力を鍛えるために、ピシュナを使って訓練した。4、5の指は独立しているが、まだ1本1本は力不足。細かい表現が苦手だったが前期の曲である「仔犬のワルツ」「ルーマニア民族舞曲」で以前よりも表現することができたと思う。

大きくて響きのある音を出すことが課題であったが、最初のころと比べるとだいぶ音が出るようになったと思う。細かく自分自身で楽曲分析を行うことで、表現の幅が増えた気がする。

②夏休みの課題と結果報告

- ・課題・・脱力した状態で、大きくて響きのある音を出すこと。
- ・結果・・脱力を完全に習得することは、かなり難しいと思っている為、初めからマスターできるとは思っていないが、以前に比べれば脱力できるようになったと思う。

腕や手首の脱力ができ、且つ、手の形は崩さず、指や手の甲はしっかりと力が入っていて、そしてちょうどよい体重がかかった時、自ずと大きくて響きのある音が出せると分かった。自分なりに大きくて響きのあるいい音が出せるフォームを色々と研究したので、以前よりも良くなっていると思う。

③後期の計画

スケール、アルペジオ、ピシュナで基礎的な練習を続け、指の力をつけ、1本1本の独立を図る。エチュードでは、音楽的に表現などにも気を付けながら取り組みたい。

バッハでは和声や調性の勉強をしているつもりで取り組み、かつ音楽的に弾きたい。また曲の構造などについてもしっかりと分析をし、勉強していきたい。

曲は、ベートーヴェンの「ピアノソナタ第8番 悲愴 第3楽章」と、ドビュッシーの「月の光」を弾く予定。

これまで、古典派はモーツァルトばかり弾いてきているのでいい勉強になると思うし、オクターヴや大きな音が苦手な私にとっては成長することができる曲だと思う。月の光では、様々な音色を自分なりに研究して、情景を表現できる力を身につけたい。様々な音色を出すことができるようになれば、今後別の曲にも生かすことができると思う。

以上

この学生Bは、前期の授業内で、改善に向けて努力し始め、夏休み中に問題解決への取り組みに

時間をかけ、自己の成長を実感することができた。その成果を、後期の第1週目の授業で、クラス全員の前で見せ、仲間から音量の変化について評価を受けた。前期のあいだ、3週にわたるリズム間違いの問題について、教員は便宜的な解決方法を取らなかった。これはマンツーマンの授業では一人でその問題を抱え込まなければならないが、グループ授業で問題点の共有が行われたために、落ち込むことなく、改善への意欲を保つことができたことと観察された。

学生Bにとって、前期は気付きの時期、夏休みは実践による成長の時期、後期は発展の時期になるようである。おそらく後期の途中で、最初の計画を上回る目標を再設定するほどの成長がみられるであろうと期待している。

学生Bの前期履修曲・・・ショパン作曲「仔犬のワルツ」、バルトーク作曲《ルーマニア民族舞曲》より「棒踊り」バッハ作曲インヴェンション6番、7番 ツェルニー作曲40番練習曲集27番、28番、ツェルニー作曲100番練習曲14番 以上

6) 終わりに

もともと、ピアノ演奏教育は、伝統的に師匠と弟子の関係で、伝行的に行われてきた。「このように弾きなさい」と指導されるのである。

しかし、我々が勉強しているバッハなどは、今から300年以上も昔の作曲家で、彼らはモダンピアノで作曲していたのではなかった。バッハはチェンバロより強弱の変化がつけられるクラヴィコードという鍵盤楽器を好んでいたが、今ほどの強弱は表現できないのは当然である。

ベートーヴェンの時代ですら楽器が異なり、例えば作品31の2『テンペスト』はヤケッシュ氏製作のウィーンメカニック5オクターブ(F_1-f^3)で作曲しており、第一楽章のラルゴでは、6小節の間ペダルを踏み続けるように指示されている。これを楽器の機能が異なるモダンピアノで当時の演奏方法のまま、弾けるだろうか。

200年、300年という月日が経って、当時の作曲家が弾いたように、そのまま伝承して現代まで伝えて演奏しなければならないのか、筆者は非常に

疑問に思う。まして、それぞれの演奏家には、異なる性格が存在するのであるから、代々それらの演奏家を介して「そのまま」であることは、あり得ない。そこで流派のようなものが生まれるのかもしれない。

芸術には流れがあり、形式によって価値観が異なり、そのために表現方法が異なる。またハーモニーは色々な周波数をもった音の重なりであるから、それがどのような響きであるのか考える必要がある。調性音楽ならその和音が互いに持っている機能があるので、これらを客観的に見て、また作曲家それぞれの特徴に敬意を払い、どう弾くべきかを考える必要がある。師匠に「こう弾きなさい」と言われて真似をするのではなく、色々な研究をして演奏することができる。

再現芸術であるから、勝手に演奏してはいけないが、色々な尊重しなければならないルールを守り、それ以外に表現の可能性が見いだされるところでは、自分なりの思いを込めることができると筆者は考える。

我が琉大ではURGCCという教育目標があるが、これは琉球大学に限らず将来の人間形成に重要である。自ら考え動いていくことのできる人間が理想であり、ピアノ演奏においても自ら考え演奏していくことができる人間に育ってほしいと筆者は願っている。

謝辞

最後に、アクティブ・ラーニング導入を温かく見守ってくださった音楽科の全ての教員の皆さまに、心より感謝を申し上げます。また、慣れない勉強方法に戸惑いながらも頑張ってくれた学生諸君、そしてケース・スタディで取り上げることを快諾してくれた学生AさんBさんにも感謝の意を表します。